カスミ

立ち食いそばを食べていると、ある女性が私の隣に立った。
「かけそば一つ。あ、あとコロッケも」
そばはすぐに提供されて、女性はそれを勢いよく吸い込んだ。コロッケそばは、別皿で提供してもらいサクサクを味わうタイプ、つゆに沈ませて出汁を染み込ませるタイプなど様々な流派があるが、女性はぐしゃぐしゃに崩して一緒くたにするタイプだった。月見そばのわかめトッピングに七味を振りかけてちんたら食べる私を追い抜き、女性はあっという間に完食した。
「食べるの遅いっすね」
女性は、私にだけ聞こえる声で呟いた。続けて前を向き、
「おかわりください」

と、言った。

女性の名前はカスミという。

あるとき私は言った。
「付け合わせのパセリになりたい。あれを草としか認識できずに無慈悲に残す凡人がいる。それでいい。料理の味を引き立たせるべくアクセントとして食べる変人がいる。それもいい。何も考えずに口に詰める阿呆がいる。それもいい。全部いい。パセリはすべてを許す。これになりたい」
彼女は笑った。
「それ寂しくない？　あっしは白米になりたい。だって米が一番うまいから」

カスミは始発列車に向かっている。荒川沿いを歩きながら、「知ってました？　ここ浅いんすよ」と言う。裸足になり、朝日に照る水をかけてくる。ぺちゃんこになっ

たラッキーストライクのソフトを吸う。明洞で買ったコンバースＣＴ７０を見せびらかす。『トゥルー・ロマンス』を観て涙する。ディズニーランドにきらきらと目を輝かす。六本木でいちばん旨いのはモスバーガーと言う。臭豆腐を平気で食べる。アフタヌーンティーで早食いする。イカスミのパエリアを食べて黒い歯を見せる。赤ワインを飲むとすぐに顔を赤らめる。けど、夜は長い。私の屁理屈を笑う。詰めが甘いと「わかんない」の一言で片付ける。たまに私を罵って「すみません、言いすぎました」と落ち込む。車窓から見えた広大な海にはっと息を飲む。地方都市のＰＡＲＣＯを歩く。コンタクトレンズ店の前に立つ店員に「暇っすね」と言う。ストリートピアノのドを押す。「美味しい」と「旨い」を使い分ける。ボウリングで１６ポンドの球を持ってくる。卓球で私がミスをすると喜ぶ。幼稚な歌い方をする。みたままつりに誘うくせに靖国問題を知らない。ホームで倒れている酔っ払いの側に黙って水を置く。スクランブル交差点のライブカメラに映って「生きてるって感じするー」と言う。浴室から出る前に全身に保湿クリームを塗りたくる。熱で寝込むと「アイス買ってきて」と言う。いたずらっぽく笑う。口を大きく開けて笑う。黙る。まっすぐ怒る。めそめそ泣く。帰る家がある。靴を揃える。眠る。寝息を立てて眠る。ただただ、眠っている。

カスミはどこにいる？